熊日1968.09.27

苦闘の15年

水俣病

発見から終止符まで すべて県人の手で

熊大医学部・坂田氏・園田氏、大きな功績

水俣病の政府結論は二十六日、第一号患者発生いらい十五年ぶりに出された。この"奇病"といち早く取り組み、原因を究明したのは熊本大学医学部の研究陣であり、また現在、患者の治療法や工場の廃液処理に有力な手がかりをつかみ、その収拾まで手がけようとしている。いっぽう三十四年、水俣病の原因究明を食品衛生調査会水俣食中毒部会に諮問したのは熊本県出身の坂田道太厚相であり、そしてきのう水俣病に政府結論を下したのも本県出身の園田厚相である。水俣病に関する限り、最初から終わりまで県出身の人々によって原因が究明され、問題が収拾されたといってよい。

水俣病の政府見解は二十六日やっと出されたが、十五年間もそれが放置されていた最大の原因は、企業側の"企業擁護"が続けられたことである。しかし、もう一つの原因は、政府の水俣病に対する認識が長く"一地方病"程度のものであったことにもよる。それを三十四年二月、いち早く熊大を中心に食品衛生調査会水俣食中毒部会（委員代表、鰐淵健之氏）をつくって、水俣病原因究明を諮問したのは県出身の坂田厚相だった。しかし鰐淵氏らが同年十一月答申を出した時には坂田氏はすでに厚相ではなかった。その後歴代の厚生大臣は熊大の結論が明らかに出ているにもかかわらず、政府見解をまとめ得なかった。結局、うやむやになったまま放置されていた水俣病問題に終止符を打ったのは県出身の園田厚相だったわけだが、水俣病に関する限りこの二氏の政治上の功績は大きい。

いっぽう"奇病"といわれ、原因が全くわからなかった三十一年当時から、マンガン、タリウム、セレンと疑わしい重金属を綿点検ついに奇病の犯人をつきとめ厚生大臣に「工場排水中に含まれるメチル水銀」と答申した熊大研究陣の功績は高く評価されるべきである。しかも熊大の地道な研究は原因究明後も続けられる。立津教授による胎児性水俣病児の六年にわたる追跡調査や、高橋教授の患者の脳中からの有機水銀除去実験の成功、入鹿山教授による有機水銀を含む廃液の無機化処理の成功など最後の治療、事後処理まで行なおうとしている。これは熊大が一貫して示した学者の良心といってよい。

最後に鰐淵熊商大学長は「水俣病の原因究明と政治的な結論が県

出身の厚相によってなされたことは、半面から言えば中央の水俣病に対する認識が低かった証左とも言える。地方はもっと自信を持つべきである。実力はあるのだ。水俣病がはっきりそれを示してくれた。今後地方から中央に向かって堂々と発言し、また、地方の実情が中央の行政にスムーズに反映される政治システムに改めるべきだ」と指摘している。